

## 第8回高知県立病院経営健全化推進委員会 議事要旨

1 日時  
平成26年11月7日（金）19時から21時まで

2 場所  
高知共済会館 3階 大ホール「桜」

3 出席者

委員	臼井委員、宇田委員（委員長）、竹村委員、廣光委員、宮井委員、横山委員
公営企業局	公営企業局長 岡林、公営企業局次長（総括）浅野、公営企業局次長 林
あき総合病院	前田院長、澤田副院長、福井経営事業部長、平瀬看護部長、宮地経営事業部次長
幡多けんみん病院	橋院長、五味経営事業部長、山本看護部長
県立病院課	県立病院課長 伊藤、課長補佐 坂本、課長補佐 山地、チーフ（総務調整）北條、チーフ（経理）水田、チーフ（経営支援）堅田、森本、松本

4 議事要旨

（1）委員長の選任について

- ・ 委員互選により、委員長は宇田委員に就任決定。

（2）平成25年度決算報告について【資料1】

- ・ 県立病院課説明（県立病院課長）
- ・ あき総合病院説明（病院長）
- ・ 幡多けんみん病院説明（病院長）

〔院長説明〕

〈あき総合病院〉

- ・ あき総合病院の新病院がこの4月にオープンし、委員の方にも開院式にご参加いただいた。建物ができ、仏を作って魂をいれずでは困るので、これからが正念場と思っている。
- ・ あき総合病院の理念は、「私たちは安芸地域とともに歩み、人々の心とからだの健康を支えていきます」。これは、シンボルマークにあるように、安芸二次医療圏を支えていくことが我々に課された仕事。
- ・ 基本方針は、やはりこの地域に足りないものとして「急性期医療」をやるのが我々の第1の仕事だと思っている。同時に、広く地域で高齢者も増えてくるので、この地域で完結するにはどうすればよいのか「地域完結医療」を目指すことが大事なことです。また、地域医療のシステムを担う病院として、若手の医師を育てる「教育」の場としたい。最終的には、地域の先生方と連携して、「地域連携」を行う病院を目指していきたい。
- ・ 中央医療圏に流出している患者を更に引き止めることができれば、収益は上がり、また二次医療圏における我々の目的を果たすことになる。そのためには、急性期医療に力を入れることが必要。入院診療単価を上げて、入院の回転数を増やす。そのためには退院もさせなければいけませんが、地域の先生方と地域連携を更に強化して入院を増やしていくことが、これからの方法だと

考えている。

- ・ 急性期医療について、当院においては5疾病5事業のうち、まず第一に救急医療がある。今年度は1,500件を超えるペースで推移しており、およそ1,600件程度を見込んでいる。平成25年は、安芸医療圏全体で2,939件の救急搬送件数があり、そのうち、当院で1,269件を受け入れている。平成26年度の1,600件の見込みで言えば、二次医療圏全体の50%を超える救急搬送を受け入れることになる。
- ・ 急性期医療、救急医療を含めてであるが、当院は従来、循環器を苦手分野としていた。しかし、新病院になってカテーテルの機器を購入し、大学の尽力により、2名の医師に着任いただき、心臓カテーテル検査など、非常に頑張っていた。非常に頑張っていた。
- ・ 手術について、本年度の上半期の手術件数は438件となっている。中医協の資料を見ると、7対1の病院は、手術件数が1,000件に達していなければ要件を満たさないとする案もあり、次期改定までに1,000件をクリアしたいと考えている。
- ・ 地域に7つの病院しかないため退院調整が難しく、亜急性期的な患者もいるので、来年4月から1病棟を地域包括ケア病棟に変更する予定としている。
- ・ 現在も研修医や高知大学の医学生の方々が来ている。医局にラウンジがあり、毎朝8時から診療科を超えて各科の医師が集まり、前日の入院患者についてカンファレンスを行っている。診療科間の壁が非常に低く、皆でやろうという雰囲気がある。こういう地域の医療機関であるので、学生や研修医の方々にとって、地域医療を学ぶことのできるうってつけの場だと思っている。
- ・ あき総合病院は、安芸病院と芸陽病院との統合を機に、病院GP、すなわち病院で勤務する勤務医でありながら総合医診療をする、そういう病院GPを養成することを当初から目的としており、来年から総合医・家庭医養成プログラムを実施することとなった。来年から研修医を受け入れるため、仮称であるが、「病院GP養成センター」を設置し、特に2025年に向けて需要が高まる総合診療医の養成を目指していく。これは、病院で総合診療医を養成する機関である。
- ・ 対象地域に6万人弱の人口がいるが、医療機関が7つしかなく、これらが連携するということが大事であり、今年の7月18日に「地域連携懇談会（ちれんこん）」を開催し、意見交換を実施した。県立病院として、東部二次医療圏（安芸保健医療圏）のための病院を目指していく。

#### 〈幡多けんみん病院〉

- ・ 幡多けんみん病院の平成25年度決算は、単年度損益でおよそ1千7百万円の赤字を計上した。放射線科医及び耳鼻科医が一時不在となった期間があり、また、放射線治療機器の入れ替えで、約9か月間稼働しなかったことなどが主な理由であり、大きな黒字は望めなかったところであるが、単年度赤字となったことは残念に思う。高知県のなかでも幡多は特に高齢化が進んだ地域であるが、人口減と高齢化の影響からか、平成26年度の上半期の様子を見ても、患者さんは循環器及び呼吸器を中心として、重症化した患者の受入を行っており、おそらく今後20年間はこの状態で推移していくため、患者は減らないのではないかと考えている。今年度の新入院患者数は一昨年度に迫り、同数程度になるのではないかと予想している。今後もそれが続くと思う。
- ・ 幡多けんみん病院は、従来から急性期を担うこととしており、他の幡多圏域内の病院、あるいは診療所と競合することはないと考えている。救急を中心に、ほとんど機能分化ができてい

と自負している。実際に、新入院患者が来ても、在院日数は13日、12日台と下がっており、なおかつそれを実現するために、地域の医師会、医療機関との連携ができています。更に、他の医療機関でできないことを県立病院として担っている。

- ・ 救急患者数は若干減っているが、これは適正化の方向ではないかと考えており、啓発や電話相談によって、中等症以上の患者さんが増えている。良好な傾向ではないかと考えている。今後の新入院患者数は6千数百人程度で推移すると思われるが、他の医療機関の方々と協議、連携しながら役割分担を一層進めていきたい。一つの医療機関だけでどうこうすることができないので、幡多全体で話し合いをしながら進めていくところである。

#### 〔質疑等〕

##### (経営状況)

- ・ 公的病院であり、税金で運営しているということもあるので、経営をしていく上で、医療を行っていく上で、患者さんに対して、常に謙虚な心を持っていただきたい。医療だけではなく、刺激し合いながら、互いが気をつけながら地域の医療をやっていかなければならない。そのあたりを大事にしてやっていけば、数字の上で赤字であったとしても、ある程度は許容されるのではないか。医療の質を上げ、皆で協力してやっていくということを、これからもしっかりとアピールしていただければと思う。

- ・ 経営状況について、赤字ではあるが、あきも幡多も、常勤医師数が増えてきているということであり、それに伴って単年度損益も圧縮されてきている。

- ・ 〈あき総合病院〉在院日数が短ければ、それに応じた加算などがある。在院日数は減らしていく方向だと思うが、地域の事情でなかなかそうもいかないことがある。もう一つ、医師数の問題があるが、医師が増えると収入が上がってくる。

- ・ 〈幡多けんみん病院〉患者数については、平成24年度が多かったということもあるが、25年度は、診療科の医師が一時的に不在となったことが多分に影響している。外来に関しては、実現が難しいが、地域医療支援病院を目指して、紹介患者さんを増やしている。逆に言えば、他の医療機関へ積極的に逆紹介を行うことで確実に外来の患者数は減っている。新入院患者数の減については、今後、カバーできるのではないかと考えている。

##### (地域連携)

- ・ 両病院は、地域医療連携室を設置しているか。高知市医師会は医師会主導で病診連携、病病連携を進めている。病院から現在の診療医、誰がいつ診療しているかという情報を、各診療所及び病院に、1月に1回ずつFAXなどで送り、患者さんを紹介しやすいようにしている。現在高知市内でも、国立、日赤、近森病院とで連携を組んでいるが、予約を取るのにとっても時間がかかる病院がある。そういう時間を短くすると同時に、病病連携、病診連携の診療所・病院の先生にできるだけ内容を知ってもらい、患者さんを送ってもらい、そしてまた、治療が終わった患者さんをまたお返しをする。そういったことがやはり病院経営にも資することだと思う。

##### (地域包括ケア病棟)

- ・ あき総合病院は、平成27年度からの地域包括ケア病棟の導入を視野に入れながら、とのこ

とだが、救急患者を増やしてオペも増やしていくことに対しては、急性期の病棟が必要だと思う。地域包括ケア病棟を総病床の中で増やし、急性期病棟を減らすことは、経営も含めて可能な状況なのか。

- ・ 〈あき総合病院〉地域の特性があるので、在院日数が長くなる患者さんもいるし、看護必要度も下がってくる。患者さんは数字でないので、この数字で病院が左右されるようになってはいけないと思っている。1病棟をバッファ的に置いて、院内でゆっくりリハビリをしてもらうなど、そういう配慮が必要となる。地域の特性を考えた施策に対応していく。

(3) 第5期経営健全化計画の取組状況について【資料2】

- ・ 県立病院課説明（県立病院課長）
- ・ あき総合病院説明（経営事業部長）
- ・ 幡多けんみん病院説明（経営事業部長）

〔質疑等〕

(病院GP養成)

- ・ あき総合病院で、病院の総合医を育てていくことは大変良いこと。まだ、新しい制度で、総合診療医というものが、どういう研修をしたらいいのか分かっていないことは問題だと思っている。学生や研修医にもっとPRする機会があれば、関心を引くのではないか。

(病床利用率)

- ・ 〈幡多けんみん病院〉6～7年前は在院日数が長く、急性期もやれば、現在、民間の病院にお願いしているような回復期、亜急性期も全てやらざるを得ない状況であった。それが積極的な連携によって、現在の状況に至っているので、病床利用率は徐々に下がっていくと思う。在院日数が短くなる一方で、新入院患者数も大幅に変わるわけではないので、確かに病床利用率が下がってくるが、80%程度が理想だと考えて目指している。病床の再編、縮小も検討してはいるが、総合病院であり各病棟にそれぞれの特色があり、1病棟を減らすのは困難というのが実情である。

(外来縮小)

- ・ 高知大学医学部附属病院でも、外来はできるだけかかりつけ医を受診してほしいということで、少しずつ減らしているが、あき総合病院も幡多けんみん病院も地域の中核病院であり、外来は縮小の方向だと考えるが、どうか。
- ・ 〈あき総合病院〉開業医の先生方も大変だと思うが、そこはうまく病診連携が必要だと思う。

(医師の確保)

- ・ 〈幡多けんみん病院〉25年度は、やはり医師の問題である。医師の数は全体的にみると確保されているかもしれないが、各科によって差があると思う。いま現在、医師がいても、来年、再来年は保障されないため、その継続性に危機感を持っている。
- ・ 〈あき総合病院〉バスケットチーム（5人の医師）が欲しい。バスケットのチームが1チームあると当院は更に良くなる。

(看護師の確保)

- ・ 〈事務局〉 県全体の看護師の数の確保や地域偏在の解消については、県全体の大きなテーマであり、県立病院での取り組みには限界がある。それぞれ県立病院は地域医療を担っているので、地域の医療機関とともに支えていくというのは当然のこと。県立病院だけが看護師をはじめとする医療スタッフを確保できればいいとは、決して考えていない。そのような目で見られることのないよう、肝に銘じていきたい。

(専門看護師等)

- ・ 看護に限定すれば、どのような専門看護師、認定看護師をどの程度養成し、病院の特色を活かすためにどのように活用するのかということの経過や報告が必要だと思う。

(査定・返戻率)

- ・ 〈事務局〉 24年度決算で、入院の査定率は、あきが0.37%、幡多が0.38%、返戻率は、あきが4.01%、幡多が4.52%となっている。
- ・ 返戻率が少し高いのでは。返戻に関しては、病名の記載を徹底することと、注記を詳しく書いていただきたい。判で押したような注記ではだめで、出来るだけ詳しい注記を記載するように。

(院内体制)

- ・ 経営に当たっては、情報をしっかりと押さえることが必要であり、経営会議において、病院長、副院長、看護部長だけではなく、情報をしっかりと押さえた職員、経営の企画をしっかりとやる職員、安全管理、そして質、これらの担当者が経営会議に必要なのではないかと。
- ・ 院長がパワーポイントの資料を作成するのではなく、専門部署が必要。医師にこのようなことをさせず、院内の組織でフォローする形を検討するとよい。また、外来などについて、医師の力を十分に発揮できるような体制整備が大切なことであり、院長を含め多くの医師のフォローをできる体制整備が、経営の大切な要素の一つ。

(その他)

- ・ 〈事務局〉 次回の開催は、決算が終わった7月から9月にかけての開催としたい。